

エッセイ

『グシ国際平和賞』(Gusi Peace Prize International) (受賞の顛末記)

塩尻和子
(筑波大学名誉教授、アラブ調査室長)

① 予期せぬ連絡

世界のあちこちで、きな臭い状況が起こるようになったばかりか、実際にロシアによるウクライナ侵攻が、多くの犠牲者や被害を出しながら、収まる気配が感じられない状況となっています。それだからこそ、世界には多くの人々の平和への願いを実現しようとして、大小の機関が「平和賞」を設定しています。

私は思いがけないことに、昨年11月にマニラに本拠を置く慈善財団から「グシ国際平和賞」(Gusi Peace Prize International)を授与されました。この賞はアジアのノーベル平和賞ともいわれているそうですが、国際的にそれほどは知られていない小さな賞で、これまで日本人は私を含めて6人しか受賞していないようです。あまり知られていない賞とは言え、私にとっては身に余る名誉なことですのでこの顛末を記録してみました。

賞を頂けることなど予期していなかった私にとってこの受賞は思いがけないことでしたが、実は一年ほど前に私の親しい友人の一人から「外国の友人から、外交官夫人の中で特別な業績を上げている人がいれば教えてほしいという依頼を受けたので、ほかに知っている人もいないので、あなたを推薦してもいいか」との趣旨の連絡を受けたことに始まります。私は一体何の事か要領を得ないまま求められるままに簡単なプロフィールを送っておきました。そのまま月日が過ぎてすっかり忘れていましたが、昨年6月初めになって突然に「グシ平和賞委員会」というところから、詳細なプロフィールと研究目的や業績などを記載した書類を顔写真3葉とともに提出するようにとのメール連絡が届きました。

その後、数回のメールによるやり取りがあり、9月12日になって「グシ国際平和賞委員会」から「あなたがグシ平和賞の受賞者に推举(nominate)された」として11月24日にマニラで行われる授賞式への参加招待状がメールで届きました。それには、この賞を受けるためには受賞者自身が受賞式に出席しなければならないとも書かれていました。しかも、渡航や現地滞在の手配や経費はすべて受賞者の負担とのことでした。

私としては、この歳で手配や経費のすべてを自己負担で海外旅行に出かけることには気後れもあり、散々悩んだ末に、親しい友人の推薦から始まったことなので、その気持ちを無にしてはいけないという思いと、残り少ない人生の中で興味深い経験のチャンスかもとの思いから出席の可能性を探り始めました。コロナ禍でもあり、知らない場所へ一人で行くのは心もとなかったが、お互いに80歳前後とはいえ、夫と一緒にあれば何とかなると考えて、「グシ平和賞委員会」からの提案に応じてマニラへ行くことにしました。

グシ平和賞の授賞式は毎年11月の第4木曜日と決められているそうで、昨年は11月24

日に式典が行われました。「グシ平和賞委員会」からの案内によれば、授賞式典の前後にはマニラ市長も出席する歓迎式典（スペイン統治時代の革命家 Jose Rizalへの献花と礼砲）を始め複数の政界有力者による連日の昼食会や夕食会、名所旧跡へのツアーナどが予定されておりました。そこで 11 月 21 日（月）マニラ着、26 日（土）同地発での日程が望ましいとのことでした。すべてが初めての経験なので、先方の案内に基づいて 11 月 21 日（月）羽田発、26 日（土）帰国という日程で渡航準備を進めました。

先ずは期限切れとなっていた私の旅券申請手続きを進め、昨今のコロナ騒動の中での渡航なのでどういう手続きが必要なのかを確認するところから始めました。80 歳を過ぎた夫がインターネットと格闘しながらフィリピンへの渡航には eArrival、帰国の際には Visit Japan Web へのコロナ・ワクチン接種証明の事前登録が必要なことや、コロナが小康状態であった当時は日本人のフィリピン短期旅行者はビザが不要であることも分かりました。

繰り返しになりますが、この賞は受賞者本人が現地での授賞式に出席しなければ賞はもらえないということでしたし、同行者を含めて現地への渡航及び滞在の手配や経費は全て自己負担でした。そこで、フライト予約と航空券手配は私が以前に勤務していた当時に縁のあった旅行社の担当者に手数料を払ってお願いし、ホテルの手配は「グシ平和賞委員会」から送られてきた Peninsula Manila（名の知れた高級ホテルでしたが、穏当な値段でした）の予約申込書に必要事項を記入して委員会とホテルにインターネットで送信すると、折り返しホテルの担当者から確認メールが届いて手続きが完了しました。

フィリピンは私たちにとっても初めての訪問地でしたが、何とか無事に帰ってきました。11 月下旬の東京ではコートが欲しい時期でしたが、現地のホテルや宴会場ではサービスの一環からか冷房が効きすぎて、私たちにとっては体調を崩しそうに感じるほどでした。屋外の気温は 30℃、湿度 80% でしたが、ホテルの部屋は 22.3℃ でした。冷房のスイッチを切っても、親切心から毎日清掃の時には ON になっていました。常夏の国での珍道中で体力は消耗しましたが、色々な経験ができた興味深い旅行でした。

② 強行軍の予定と厳しい服装規定

今回の受賞指名者 16 名の中で 2 人（フランス人女性と台湾人男性）は欠席しており、受賞者の数は 14 名となりました。私は夫と共に参加したのですが、ご夫婦での参加という人も少なくありませんでしたが、中には夫人とお子様連れという方もいましたので、とても賑やかな集いとなりました。事前に送られてきた予定表には毎回の行事に合わせた集合時間が示されており、その際の服装もそれぞれの行事に合わせて casual、business formal から strictly highly formal まで指示されていました。連日昼夜を問わず（時には早朝も）行事はぎっしりの強行軍でした。早速 2 日目の夜に、有力政治家の邸宅でフォーマルな夕食会がありました。深夜になってようやくホテルに戻り 24 時頃に就寝しましたが、翌朝には 5 時にホテルのロビーに集合して上述のマニラ市長も出席する歓迎式典に参加する予定がありました。前日の慣れない夜更かしで私は疲労のために起きられず、夫が代わって参加してくれました。年配の私どもは、行事の最中に体調を崩しそうになって一行について行くことができなくなり、断ってホテルで休息をとることも何回かありました。温度差の大きい場所での過密日程で体力の消耗を感じた一週間でした。体

調が戻ったのは帰国後一か月もたってからでした。

③ 国軍の登場

グシ慈善財団を率いるバリー・グシ会長は外交官だったこともあり、現在でも「アンバサダー」という称号を用いています。夫については「日本の本物の大使が来てくれた」と言ってとても喜んで下さり、いつも私とセットで紹介していただきました。日本人の姓と名の順序に不慣れなのか、時には私たちの名前が「ドクター・シオジリとアンバサダー・カズコ」となることもありましたが、私たちは気にしないでこやかに応答しました。



(上の写真①) マニラ市内のいたるところに受賞者の顔写真が大きく掲示されていました。私の顔写真は急には用意できず、10年近く前に撮影したものを持出しました。

今回の授賞式典の当日、開会の直前にバリー・グシ会長が受賞者だけを別室に呼んで内々に話がありました。それによると、今年の表彰式は開会の直前に大きな変更が伝えられ、フィリピン軍が差配することに決まったそうです。これまでグシ慈善財団による民間団体の授賞式で、公権力の介入はなかったのですが、今回は初めて国軍の指導下で実施されました。授賞式開始直前にこの変更が伝えられたので、グシ会長はショックを受けていたようでした。マルコス2世が大統領に就任したことでも影響しているのかもしれません。受賞者はそれぞれの母国の国旗を捧げ持つ兵士の先導で入場し、表彰盾も将官レベルの軍関係者から手渡されました。後掲の写真からも、国軍関係者が中心になっていることが分かります。



(上の写真②) 左端がバリー・グシ会長、私は軍関係者から表彰盾を受け取りました。



(上の写真③) 全受賞者 14 名の受賞後の記念写真、女性は 3 人でした。

表彰盾の一番下にはフィリピン大統領の署名もあり、私の受賞理由は「平和的な宗教間対話の推進とイスラーム理解」として、英語で書き込んでありました。小さい賞とはい

え、まだ何も世界平和に貢献した成果がないので、お恥ずかしいことでした。表彰盾の文字は写真では読み取りにくいかもしれませんが、拡大してご覧になってください。

(下の写真④) 受章盾です。一番下にマルコス大統領 (H. E. Ferdinand Bongbong Romualdez Marcos Jr.) のサインがあります



④ フィリピン社会の印象

この経験は、初めて訪れたフィリピンの社会について、興味深い印象も与えてくれました。滞在中に連日のごとく大きな宴会が催されました。その多くがホテルを会場にして200人から400人の客を招待していました。しかし、大騒ぎの割に食事はシンプルなもので、私どもには有難かったです。宴会では伝統的なダンスが次々と披露され、毎回大賑わいとなりました。年配の方を含めて現地の女性たちは、一昔前のマルコス大統領夫人が着ていたような胸と背中が大きく開いたドレスを着て大変なおしゃれをしていました。

宴会の中で最も印象的だったのは、2日目の夜に行われた Tabao Residence での最初の夕食会でした。これはホテルでの大きな宴会ではなく、フィリピンの有力者 Tabao 家の邸で50人くらいが集まって小規模ながらも豪華な晩餐会となりました。専門の料理人が

入ってその場で調理した料理で持て成し、ピアノの生演奏で出席者が次々と自慢の喉を披露し、ホスト役の政治家の親族や子供たちも堂々と客人の間に入って会話を楽しむ様子は、まるでその地域の領主の館に招かれたかに思えました。この館の一帯は、タバオ家に従う人々が住み、敷地内にある会社や工場で日々働く土地であり、独自の警備体制も整っているようでした。これはまさにマルコス家が北部ルソン島のイロコス地方を本拠としているのと同様に、政治的実力者の領土となっているように感じました。

ともかく、フィリピン流というのか、行事はぎっしりですが、時間はあまり守られないことが多く、昼夜を問わない「大騒ぎ」となり、年配の私どもは時として一行について行くことができませんでした。最終日（帰国の前日）は、疲労のために午前中の行事は欠席して、午後からのお別れ会には出席する予定していました。ホテルのロビーで迎えの車を待っていたのですが、結局、金曜日の夜で道路が混んでいるということで、迎えの車は来ることもなく、私たちはホテルの部屋へ引き上げざるを得ませんでした。でも、帰国後の体調を考えたら、それでよかったですと思っています。

今回の授賞式関連の行事では、私たちはホテルから会場まで他の受賞者たちと一緒に手配されたマイクロバスで移動しました。グシ慈善財団は民間団体だと理解していますが、私たちが乗るマイクロバスは常に数台のパトカーと警察車両が先導していました。少々の遅れや混乱はありながらも過密な行事を何とか実施できたのは、マニラ市内の夕方のラッシュ時間帯の殺人的な混雑を鮮やかにかき分けながら先導してくれた彼らのおかげだと思います。今回のこの授賞式を国軍が差配したこととあわせて考えると、杞憂かもしれないが、グシ国際平和賞を国家が利用しようとしているのかもしれませんと感じてしまいました。

⑤ 日本人受賞者

この度のグシ国際平和賞の受賞は本当に思いがけないことでしたので、帰国直後には多くの方々に知っていたらしく考えてはいませんでした。しかし、私より前に受賞された日本人の方々が、勤務地などの新聞や大学の報告書に大きく掲載されているのを見まして、私の場合も、推薦してくださった友人や、現地でお世話になった「グシ慈善財団」関係者の好意に応えるためにも、恥ずかしく感じながらも公開してもいいのではと思うようになりました。

帰国後、私が確認した限りではこれまでこの賞を受賞された日本人の方々は5人で、その中の3人までが岡山大学医学部の出身でした。日本人の中で最初に受賞された大平猪一郎博士と、国際医療ボランティアAMDAの創立者である菅波茂先生、岡山大学大学院の佐野俊二教授の3人の先生方にくわえて、実は私も岡山県出身ですので、受賞者の中に岡山県関係者が私を含めて4人もいることも驚きました。そのほかに創価学会の池田名誉会長も2016年に受賞されています。池田名誉会長の場合は代理の副会長が出席されたとのことでした。残る5人目は徳島文理大学薬学部の浅川義範教授です。

当初、私は自分が5人目かもしれないと考えていたのですが、今のところ、私は6人目になるようです。そのほかの日本人の受賞者がいたら、教えてほしいと思っています。今回の2022年も受賞者の多くは実業家、政治家、経営者、医師、デザイナーなどという人

が多く、人文系の大学教育に関するものは私一人でした。

受賞者は各自、短いスピーチをすることになっていて、私は受賞スピーチの中で、大阪外国語大学でアラビア語を学んだこと、平和的な宗教間対話を成功させるためにはイスラーム理解が鍵になることなどを話しました。今年を振り返りますと、5月1日の大阪大学90周年・大阪外国語大学100周年（2007年に大阪大学外国語学部として大阪大学と統合）の祝賀講演会で、大阪外国語大学の卒業生を代表して記念講演をさせていただいたことと共に、グシ国際平和賞の受賞は身の引き締まる出来事でもあったと、思います。

⑥ 感謝

板垣雄三先生を始め、恩師や研究仲間たち、アラブ調査室の読者の方々から「これまで積み重ねてきた仕事が、的確に評価されたもの」として、苦労が実ったと喜んでいただきました。グシ国際平和賞は尊敬する恩師たちからのご指導と、研究仲間たちの叱咤激励と研究協力の賜物かと思います。皆様、本当にありがとうございます。

これまでも「平和的な宗教間対話」を目指して研究を続けてまいりましたが、なかなか成果は上がっていません。年齢を考えますと、元気なうちにもっと頑張らなければならぬと思っています。どうか先生方、皆様、若い方々も、ご遠慮なく、今後とも厳しいご指導やご意見をお願いいたします。

（2023年1月9日記）

グシ国際平和賞について

グシ国際平和賞（Gusi Peace Prize International）は、太平洋戦争時に日本軍に抵抗したフィリピンの抗日ゲリラの英雄だったグシ（Gemeniano Javier Gusi）氏を記念して息子のバリー・グシ（Barre Gusi）氏が2002年に創設したものです。太平洋戦争時のフィリピンの人たちにとっての英雄は日本人にとっては敵でした。大戦では約50万人の日本兵が戦死、100万人以上のフィリピン人が命を落としました。グシ平和賞を日本人が受賞することには特別な意味があると聞いています。太平洋戦争の怨念（おんねん）を超えた世界平和への貢献として考えられているようです。この賞は、様々な分野で世界の平和と進歩に貢献した人、或いは、団体に贈られる賞となりました。年間1000人以上の自薦他薦の中から、その年の受賞者が決まるそうです。

グシ国際平和賞については、ネットで「グシ平和賞」を検索してください。日本語で過去の受賞者の解説や私に関することも掲載されています。

英文では、https://en.wikipedia.org/wiki/Gusi_Peace_Prize に簡潔に解説が掲載されています。